中

の世の凡ての何ぞはかなき。 すら時に悲歌を嘆ず、 **永**なごう 0 時を の流れの尽きざるに、

彼の寮を思ひ浮べて心静かにゅうようなようができ返よ、

春秋ここに二十六 っては

逝きて帰らぬ春風を

恨む今宵の若草 これ先人が夢の跡かな Ó 上ž 星永遠に流れ 高遠を誇る自治寮よ

手折りて結ぶた 原始の森に咲く の森に咲く 光る瞳は幸福星か ゆ る生命のかがり火に りて結ぶ友垣がともがき の森に咲く枝を

く正しく友よ生きなむ

別である。 の歌た を奏でん。

吾に友あり、明日の宿居は 降る苦難をともにせん は知り 吾れっぱ らね ども

立くは誰た そ

今宵限りのこの宴かなこょいかぎ 尽きぬ名残の涙する 誓ふ心の酒杯に